The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	語義変化と漢字表記 ： 『太平記』諸本の「コハシ」「ツヨシ」を手がかりとする考察
Author(s)	橋本, 行洋
Citation	語文. 1993, 61, p. 21-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68861
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

語義変化と漢字表記

――『太平記』諸本の「コハシ」「ツョシ」を手がかりとする考察――

橋本行洋

はじめに

特定の文献に対して複数の異なる伝本が存在する場合、諸本間において何らかの異同が見られることは周知の事実である。そしてその中には書承の過程における言語意識及びその変化を反映するものも少なくないと思われる。筆者は以前に『平家物語』の写本間における「コハシ」―「ツョシ」の異同を材料として「強」字に関わる用字意識の混乱について報告を行ったことがある。[1] 本稿ではその結果を踏まえ、『太平記』諸本に見られる「コハシ」「ツョシ」の用例を手がかりとして、語義変化と漢字表記の関係を検討し、用字意識の問題について考察を加えたい。

一　調査対象及び調査手順

本稿において調査の対象としたのは以下の諸本である。[2]（傍線部略称）

○整版本＝内閣文庫蔵元和八年杉田良庵刊片仮名交り整版本[3]

○古活字本＝天理図書館蔵慶長元和中刊無刊記片仮名交り古活字本、内閣文庫蔵慶長十四年刊平仮名交り古活字本、京都大学図書館蔵寛永元年刊平仮名交り古活字本

○古写本＝神田本、玄玖本、神宮徴古館本、今川家本、筑波大学本、築田本、正木本、西源院本、梵舜本、神宮文庫本、天理本、義輝本、京都大学蔵本、日置本

分析を行うための基礎作業として、まず築田本、京大本、慶長十四年刊平仮名交り古活字本、元和八年片仮名交り整版本、寛永元年平仮名交り古活字本を底本[4]として『太平記』に見られる形容詞「コハシ」「ツョシ」の用例[5]を調査し、その結果を〈表一〉にまとめた。但し、慶長元和中無刊期刊片仮名交り古活字本（傍訓以外は元和八年整版本と同）の本文・巻次を掲出し、日本古典文学大系本における巻次及び頁数を併記した。[6] 次に〈表一〉の各例について、他本との異同を〈表二〉に示した。以下、これらの資料をもとに考察を進める。（なお、原本に用いられている異体字は全て通行の字体に改めた。また本文中では基本的に各用例を〈表一〉〈表二〉に記した用例番号によって示す。）

〈表一〉

1 所ニハ地頭強メ、領家ハ弱、国ニハ守護重メ、国司ハ軽シ。
（巻一・一―三六）

2 枕ナル鎧取テ打著セ、上帯強ク縮サセテ、猶寝入タル者ドモヲゾ起シケル。
（巻一・一―五〇）

3 寄手雲霞ノ如シト云ヘドモ思切タル者ドモガ、死狂ヲセント引籠タルガコハサニ、内ヘ切テ入ントスル者モ無リケル処ニ、伊藤彦次郎父子兄弟四人、門ノ扉ノ少シ破タル処ヨリ、這テ内ヘゾ入タリケル。
（巻一・一―五二）

4 加様ニ大手ノ軍強ケレバ、佐々木判官ガ手者千余人、後ヘ廻テ錦小路ヨリ、在家ヲ打破テ乱入ル。
（巻一・一―五二）

5 或夜雨風烈シク吹テ、番スル郎等共モ皆遠侍ニ臥タリケレバ、今コソ待処ノ幸ヨト思テ、本間ガ寝処ノ方ヲ忍テ伺ニ、本間ガ運ヤツヨカリケン、今夜ハ常ノ寝処ヲ替テ、何クニ有トモ見ヘズ。
（巻二・一―七六）

6 二ノ太刀ヲ余リニ強ク切ントテ弓手ノ鐙ヲ踏ヲリ、已ニ馬ヨリ落ントシケルガ、乗直リケル処ヲ、
（巻二・一―八八）

7 前ニハ笠置ノ城強シテ、国々ノ大勢日夜責レドモ未落、
（巻三・一―一〇四）

8 次ニ賢人所帰則其国強、臣聞呉王夫差ノ臣下ニ伍子胥ト云者アリ。
（巻四・一―一四一）

9 去程ニ楠ガ城強クメ、京都ハ無勢也ト聞ヘシカバ、赤松二郎入道円心、播磨国苔縄ノ城ヨリ打出デ、山陽・山陰ノ両道ヲ差塞ギ、山里・梨原ノ間ニ陣ヲトル。
（巻七・一―二二七）

10 楠兵衛正成金剛山ニ城ヲ構テ楯籠候処ニ、東国勢百万余騎ニテ上洛シ、去二月ノ初ヨリ責戦候トイヘ共、城ハ剛（ツヨフ）メ寄手已ニ引色ニ成テ候。
（巻七・一―二二九）

11 縦馬強クメ渡ル事ヲ得タリトモ、アノ大勢ノ中ヘ只一騎懸入タランハ、不被討ト云事可不有。
（巻八・一―二四六）

12 宇野ト伊東ハ馬強メ、一文字ニ流ヲ截テ渡ル。
（巻八・一―二四六）

13 是以小砕大、以弱拉剛行也トテ、七千余騎ヲ七手ニ分テ、三条河原ノ東西ニ陣ヲ取テゾ待懸タル。
（巻八・一―二五七）

14 今日ニ於テハ、縦御方負テ引トモ引マジ、敵強クトモ其ニモヨルマジ、
（巻八・一―二六三）

15 縦力コソ強クトモ、身ニ矢ノ立ヌ事不可有。
（巻八・一―二六四）

16 陶山ハ東寺ノ軍強シトテ、俄ニ八条ヘ向ヒタリケレバ此陣ニハナシ。
（巻九・一―二九五）

17 東寺・西八条・針・唐橋ニ引ヘタル、六波羅ノ兵一万余騎、木戸口ノ合戦強シト騒デ、皆一手ニ成、東寺ノ東門ノ脇ヨリ、湿雲ノ雨ヲ帯テ、暮山ヲ出タルガ如、マシクラニ打テ出タリ。
（巻九・一―二九八）

18 懸ケル処、赤橋相模守、今朝ハ州崎ヘ被向タリケルガ、此陣ノ軍剛メ、一日一夜ノ其間ニ、六十五度マデ切合タリ。
（巻十・一―三三三）

19 盛高モ岩木ナラネバ、心計ハ悲シケレ共、心ヲ強ク持テ申ケルハ、
（巻十・一―三五一）

20 御乳母ノ御妻ト申者ハ、歩跣ニテ人目ヲモ不憚走出サセ給テ、四五町ガ程ハ、泣テハ倒、倒テハ起跡ニ付テ被追ケルヲ、盛高心強行方ヲ知レジト、馬ヲ進メテ打程ニ後影モ見ヘズ成ニケレバ、
（巻十・一―三五二）

21 スハヤト見ケル処ニ、源氏ノ運ヤ強カリケン、
（巻十・一―三五五）

22 余ニツヨク被煮テ、此頭少シ爛テ目ヲ塞ギタリケルヲ、
（巻十三・二―三五）

23 サレドモ武運強ケレバニヤ、敵今夜ハ寄来ラズ。

24 余ニ強ク被踏テ、二筋渡セル八九寸ノ関ノ木、中ヨリ折テ、
（巻十四・二―五八）
（巻十五・二―九七）

25 サレドモ将軍ノ御運ヤ強カリケン、日既ニ暮ケルヲ見テ、追手桂川ヨリ引返ケレバ、
（巻十五・二―一〇五）

26 余ニ強ク乗タル馬共ナレバ、皆疲テ更ニハタラキ得ザリケル間、
（巻十五・二―一〇七）

27 義貞朝臣ハ、態鎧ヲ脱替ヘ馬ヲ乗替テ、只一騎敵ノ中ヘ懸入々々、何クニカ尊氏卿ノ坐スラン、撰ビ打ニ討ント伺ヒ給ヒケレドモ、将軍運強クシテ、遂ニ見ヘ給ハザリケレバ、無力其勢ヲ十方ヘ分テ、逃ル敵ヲゾ追ハセラレケル。
（巻十五・二―一一〇）

28 女モ最物ワビシウ哀ナル方ニ覚ヘケレドモ、吹モ定ヌ浦風ニ靡キハツベキ煙ノ末モ、終ニハウキ名ニ立ヌベシト、心強キ気色ヲノミ関守ニナシテ、早年ノ三年ヲ過ギニケリ。
（巻十五・二―一一九）

29 御方ノ軍勢ハ皆兵粮ニ疲、敵陣ノ城ニハ弥強リ候ハンカ。
（巻十六・二―一三五）

30 馬ヨリ落ケル時、胸板ヲ馬ニ強ク踏レテ、目昏魂消ケレバ、
（巻十六・二―一三八）

31 猶モ弓ヲ強ク引ン為ニ、著タル鎧ヲ脱置テ、脇立許ニ大童ニナリ、
（巻十七・二―一八二）

32 藤島ノ戦強ク、官軍ヤ、モスレバ追立ラル、体ニ見ヘケル間、
（巻二十・二―三一九）

（注）写本群では「藤島の戦」を「藤島の城」とする。

33 空キ人ニ取付タルヲ、山城守心強カキ懐キ、太刀ノ柄ヲ垣ニアテ、諸共ニ鐔本迄貫レテ、抱付テゾ死ニケル。
（巻二十一・二―三六〇）

34 余リニツヨク走テ候程ニ、息絶テソレマデモ参リ得ズ候。
（巻二十一・二―三六一）

35 馬強カラン人々ハ我ニ同ジ給ヘ、
（巻二十一・二―三六二）

36 敵ノ強キヲバ不顧、御方ニ笑レン事ヲ恥テ、
（巻二十二・二―三六八）

37 世モ上代、仁徳モ今ノ君主ニ増リ給シ後鳥羽院ノ御時ハ、上ノ威モ強ク下ノ勢モ弱シカドモ下勝チ上負ヌ。
（巻二十七・三―六三）

38 元弘建武以後三百余箇度ノ合戦ニ、敵ヲ靡ケ御方ヲ助ケ、強キヲ破リ堅キヲ砕事其数ヲ不知。
（巻二十九・三―一一七）

39 血気ノ勇者ト申ハ、合戦ニ臨毎ニ勇進ンデ臂ヲ張リ強キヲ破リ堅キヲ砕ク事、如鬼忿神ノ如ク速カナリ。
（巻二十九・三―一四四）

40 若又武家強テ南方ノ官軍打負ケバ、失ヒ奉ル事モ何様有ヌベシト思召ツヾクル時ニコソ、
（巻三十・三―一七二）

41 又将軍ノ御運ノツヨキ所ナリ。
（巻三十一・三―一八二）

42 阿保・荻野ガ兵共余リツヨク被攻テ、一支モ支ヘズ谷底ヘ懸落サレケレバ、久下五郎ヲ始トシテ討ル、者四十余人、疵ヲ被ル者数ヲ不知。
（巻三十二・三―二一三）

43 誰ニテヲハスルゾ。手負ナラバ我ガ腰ニ強ク抱著給ヘ。助奉ラン。
（巻三十二・三―二三六）

44 縦弓強ク遠矢ヲ射ルトモ、人ニ射アツル事ハ不可有。
（巻三十五・三―三三一）

45 貌醜ク舌強クシテ、母ノ乳ヲ呑スル事ヲ不得。僅ニ酥蜜ト云物ヲ指ニ塗、舐セテゾ命ヲ活ケタリケル。
（巻三十五・三―三三三）

46 其勢已ニ丹波ノ篠村ニ著シカバ、当国ノ兵共、心ヲ両方ニ懸テ、何方ヘカ著マシト思案シケル者共、今ハ将軍方ゾ強カランズラント見定テ、我先ニト馳付ケル程ニ、篠村ノ勢ハ日々ニ勝テ無程五千余騎ニ成ニケリ。
（巻三十八・三―四〇三）

〈表二〉

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
慶長片活	強	強ク	コハサ	強ケレ	ツヨカリ	強ク	強	強	強ク	剛	強ク
元和整版	強ツヨフ	強クツヨ	コハサ	強ケレツヨ	ツヨカリ	強クツヨ	強ツヨフ	強ツヨシ	強クツヨ	剛ツヨク	強クツヨ
慶長平活	つよく	つよく	こはさ	つよけれ	つよかり	つよく	つよく	つよし	つよく	つよく	つよく
寛永平活	つよく	つよく	こはさ	つよけれ	つよかり	つよく	つよく	つよし	つよく	つよく	つよく
神田	ツヨク	ツヨク	コワサ	強カリ	φ	φ	φ	φ	つよく	剛ニ	ツヨク
玄玖	強	強ク	強サ	強カリ	φ	強ク	強コ	φ	強ノ	強	強
徴古	強クツヨク	強く	強さ	強かり	不尽	強く	強	強コハシ	強	強	勁クツヨク
今川	ツヨク	ツヨク	コハサ	強カリ	ツヨカリ	強クツヨ	強ク	φ	ツヨク	剛	ツヨク
筑波	ツヨク	ツヨク	コハサ	強カリ	ツヨカリ	強ク	強ク	φ	ツヨク	剛	ツヨク
簗田	つよく	つよく	こわさ	こはかり	つよかり	つよく	つよく	こはし	つよく	つよく	つよく
正木	ツヨク	強ク	コハサ	強カリ	φ	強ク	剛ク	φ	ツヨク	強	ツヨク
西源	強クツヨ	ツヨク	強コワサ	強コカリ	φ	強クツヨ	強ク	φ	ツヨク	剛ク	ツヨウ
梵舜	ツヨク	ツヨク	コワサ	強カリ	強ヨカリ	ツヨク	強ク	φ	強クリ	剛	強クツヨ
神宮	強ク	ツヨク	コハサ	強カリ	強カリ	ツヨク	強ク	φ	強リ	剛	強
天理	強ク	ツヨク	コハサ	強カリ	強カリ	ツヨク	強ク	φ	強リ	剛	強
義輝	強	強ツヨク	φ	強カリ	φ	φ	強ク	φ	強コハク	φ	ツヨク
京大	φ	φ	φ	φ	φ	φ	φ	φ	φ	φ	φ
日置	強クツヨク	強クツヨ	コハサ	剛クツヨカリ	ツヨカリ	強クツヨク	強クツヨク（ヤマ）	ツヨシ	ツヨク	剛カタク	強

（注）各本において欠巻あるいは該当部分が存在しない場合、及び表現の異なりのため対照不可能な場合は「φ」の記号で示した。

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
強ケレ	ツヨク	強カリ	強	強ク	剛	強シ	強シ	強ク	強ク	剛	強
強ケレ	ツヨク	強カリ	強ツヨク	強ツヨク	剛ツヨク	強シツヨシ	強シツヨシ	強ツヨク	強ツヨク	剛ツヨキ	強ツヨブ
つよけれ	つよく	つよかり	つよく	つよく	こはく	こはし	こはく	つよく	こはく	つよき	つよく
つよけれ	つよく	つよかり	つよく	つよく	つよく	つよし	つよし	つよく	つよく	つよき	つよく
ツヨけれ	強ク	つよかり	強ク	φ	剛	こはし	コハシ	ツヨク	こはく	剛	ツヨかり
強ケレ	勁ニ	強カリ	強ジク	φ	剛ク	強シ	強コ	勁ツヨク	強	強	強カリ
強けれ	勁ツヨク	φ	φ	φ	φ	強し	強し	勁	強	強ナヤウ	勁ツヨかり
ツヨケレ	ツヨク	ツヨク	ツヨク	φ	剛ク	強シ	コハシ	強ク	コハク	剛	ツヨカリ
ツヨケレ	ツヨク	ツヨク	ツヨク	φ	剛コハク	強シ	コハシ	強ク	コハク	剛	ツヨカリ
つよけれ	つよく	つよく	つよく	φ	こはう	こはし	こはし	つよく	こはく	がう	つよかり
ツヨケレ	ツヨク	ツヨク	ツヨク	φ	剛	強シ	強ク	強ク	コハク	剛	強カリ
健スクヤカナリ	ツヨク	φ	φ	φ	強	コハシ	コハシ	ツヨク	コハク	剛コワキ	ツヨカリ
強ケレ	ツヨク	強カリ	強ク	ツヨク	剛	強シ	強シ	強ク	強ク	強キ	強ジ
強ケレ	ツヨク	強カリ	強ク	φ	剛	強シ	強ツヨ	勁ツヨク	強	強	強カリ
強ケレ	ツヨク	強カリ	強ク	φ	剛	強シ	強	勁ツヨク	強	強	強カリ
強ケレ	強ツヨク	ツヨカリ	ツヨク	ツヨク	剛	強	φ	ツヨク	強コハク	剛ツヨキ	ツヨカリ
つよけれ	つよく	つよかり	づよく	φ	こはく	こはし	こはし	つよく	こはく	こはき	つよかり
強ケレ	勁ツヨク	強カリツヨ	φ	φ	剛ツヨク	強シツヨ	強ツヨ	強ツヨク	強ツヨク	剛コハキ	強カリ

	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24
慶長片活	ツヨク	強	強	強ク	強ク	強リ	強キ	強ク	強ク	強カリ	強ク
元和整版	ツヨク	強ツヨク	強ツヨク	強ツヨク	強ツヨク	強リツヨク	強キツヨク	強ツヨク	強ツヨク	強カリツヨク	強ツヨク
慶長平活	つよく	つよく	こはく	つよく	つよく	つより	つよき	つよく	つよく	つよかり	つよく
寛永平活	つよく	つよく	つよく	つよく	つよく	つより	つよき	つよく	つよく	つよかり	つよく
神田	φ	φ	こはく	ツヨク	φ	ツヨら	つよき	つよく	つよく	ツヨカリ	つよく
玄玖	ツヨク	ツヨク	強コ	強ク	勁ク	強カラ	勁キ（ママ）ツヨキ	強	強ク	強カリ	強ク
徴古	強く	強く	強	強く	強く	強り	φ	φ	φ	φ	φ
今川	ツヨク	ツヨク	強コバク	強ク	φ	強カラ	ツヨク	ツヨク	ツヨク	ツヨカリ	ツヨク
筑波	ツヨク	ツヨク	強	強ク	強ク	強カラ	ツヨキ	ツヨク	ツヨク	ツヨカリ	ツヨク
築田	φ	つよく	つよく	つよく	つよく	つよからら	つよき	つよく	つよく	つよかり	つよく
正木	ツヨク	強ク	強	強ク	φ	強リ	ツヨキ	強ク	ツヨク	ツヨカリ	ツヨク
西源	ツヨク	ツヨク	コハク	強ク	強ク	強リ	ツヨキ	強ツヨク	強ツヨク	ツヨカリ	剛ツヨク
梵舜	φ	強ク	強ク	強ク	強ク	強リツヨ	強キ	強ク	強ク	強カリ	強ツヨ
神宮	φ	強ク	強ク	強ク	強ク	強リ	強キツヨ	強ク	強ツヨ	強カリ	強ク
天理	強ク	強ク	強	強ク	強ク	強リ	強キ	強	強ク	強カリ	強ク
義輝	φ	φ	強	強ク	φ	強リ	ツヨキ	強ク	強ク	強カリツヨ	ツヨク
京大	つよく	つよく	φ	つよく	つよく	つより	つよく	つよく	つよく	つよかり	つよく
日置	強ク	ツヨク	強	強ツヨク	勁ツヨク	効リツヨカ（ママ）	強ツヨキ	強ツヨク	強ノヨク	φ	剛（ママ）ツヨク

46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35
強カラ	強ク	強	強ク	ツヨク	ツヨキ	強	強キ	強キ	強ク	強キ	強カラ
強カラ(ソロ)	強ク(ソロ)	強(ソロク)	強ク(ソロ)	ツヨク	ツヨキ	強(ソロク)	強キ(ソロ)	強キ(ソロ)	強ク(ソロ)	強キ(ソロ)	強カラ(ソロ)
つよから	こはく	つよく	つよく	つよく	つよき	強	つよき	つよき	つよく	つよき	つよから
つよから	こはく	つよく	つよく	つよく	つよき	つよふ	つよき	つよき	つよく	つよき	つよから
φ	コハク	つよく	つよく	つよく	ヨキ(ツヨ)	φ	φ	φ	強ク	φ	φ
強カラ	強	強	勁ク(ソロ)	強ク	尽ヌ	ツヨク	φ	強	φ	ツヨル	強カラ
強から	強	強	勁く(ソロク)	強く	不尽	強く	φ	強	φ	φ	勁から(ソロ)
強カラ(ソロ)	強ク(コハ)	強ク	強(ソロク)	ツヨク	ツヨキ	ツヨリ	φ	φ	強ク	ツヨル	強カラ(ソロ)
ツヨカラ	コハク	ツヨク	ツヨク	ツヨク	ツヨキ	ツヨリ	φ	強	φ	ツヨル	ツヨカラ
つよから	こはく	つよく	つよく	つよく	つよき	つより	φ	こはき	φ	つよる	φ
強カラ	強ク	ツヨク	ツヨク	ツヨク	ツヨキ	ツヨリ	φ	強	φ	健ル	強カラ
ツヨカラ	強(コ)	健ク(ソロ)	健ク(ソロ)	健ク(ソロ)	ツヨキ	ツヨリ	φ	強	強ク	健(ソロル)	強カラ
強カラ	強ク	強	強ク	ツヨク	強キ	強(ソロク)	強キ	強キ	強ク	強キ	φ
強カラ	強ク	強	強ク	強ク	強キ	強ク	強キ	強キ	強ク	強キ	φ
強カラ	強ク	強	強ク	強ク	強キ	強ク	強キ	強キ	強ク	強キ	φ
φ	強(コハ)ク	強ク	強(ソロク)	φ	φ	φ	強	強	φ	強(ソロル)	φ
つよから	こはく	つよく	つよく	つよく	つよき	つよく	φ	つよき	φ	つよき	つよから
強ラ	強	強	強ク	強(ソロク)	φ	強	φ	強(ソロキ)	強ク	勁(ソロカ)ル	ツヨカラ

二　『太平記』諸本における「コハシ」―「ツョシ」の異同

〈表二〉を参照すると、『太平記』の諸本間には和語「コハシ」―「ツョシ」間の異同の認められるものが全体の約四分の一（4・7・8・9・13・14・16・17・18・32・38・45の十二例）にわたって見られる。

しかし、このような異同は仮名表記されたものを誤読したことが原因とは考えられない。[7] そこで諸本における漢字表記に注目すると、何れの例にも「強」あるいは「剛」という漢字を用いたものが見られ、おそらくはこの漢字表記の介在が異同の原因と考えられる。すなわち「コハシ」「ツョシ」がそれぞれ「コハシ」→「強シ」「剛シ」[8]、「ツョシ」→「強シ」（「剛シ」[9]）と漢字表記されている場合、それらの例を判読する際に「コハシ」「ツョシ」の何れに読むべきか区別しにくい事態の生じたことが推測されるのである。たとえば玄玖本等には「強」に対してしばしば「強」「強」という語頭訓が示されているが、これは「コハシ」―「ツョシ」間の誤読を避けるために付されたものと考えられる。[10] しかし、このような混乱が常に、どのような場合においても生じ得たのかというと、必ずしもそうではない。以下これらの例についてその意味・用法を検討する。

前掲の諸例のうち、たとえば4・7・14・16・17・18・32・38は「軍」や「敵」、「城（の軍勢）」等が頑強に抵抗するさま、あるいは「合戦」の激しい状況が手に負えないと感じられるさまを表現するものである。本来「コハシ」は「ツョシ」との類義的な側面を有しながらも、客観的に〈強い状態〉を表わす「ツョシ」とは異なり、形容の対象となるものの属性がそれに相対するものに何らかの抵抗をもって受けとめられるという、いわば〈抵抗のある状態〉を示すものである。[11] 上記の例は何れも対象の有する勢力の強さ・激しさが手ごわい状態（以下このような意味を〔「手ごわい」意〕と称する）、すなわち〈抵抗のある状態〉を示すものと考えられ、平安時代の文献にしばしば見られる、

○くるしげなるもの―中略―こはき物のけにあづかりたるげんざ。げんだにいちはやからばよかるべきを、さしもあらず、さすがに人わらはれならじとねんずる、いとくるしげなり。

（『枕草子』一五七段）

のような「もののけ」等に用いられた「コハシ」と同様のものと考えられる。また、

○コワカラン所ヲハ何度ナリトモ為朝ニマカセ給ヘ。打破テミセ奉ラン。

（文保本『保元物語』中巻・白河殿義朝夜討ニ寄セラルル事）

○奴原はこはい御敵で候。かさねて勢を給はらん。

（覚一本『平家物語』巻九・六ケ度軍）

○威望モイツシカオトロヘ、東国ノ軍スデニコハク成テ、平氏ノ軍所々ニテ利ヲウシナヒケルトゾ。

（国学院大学蔵本『神皇正統記』巻下）

のような類例も多く見られるところから、これらは本来「コハシ」の例であったと考えられる。

但し、9の例は諸本における異同の状況からみてむしろ「ツョシ」の例であったように思われる。これは1・37及び46の例、あるいは『平家物語』の

○倩此世間のありさまをみるに、源氏の御方はつよく、平家の御

方はまけいろにみえさせ給ひたり。

（覚一本『平家物語』巻九・越中前司最期）

のような例と同様、双方の強弱関係を客観的に述べる場面に使われたものと考えられる。しかし本例は後掲する「ツョシ」の諸例とは異なり、文脈の捉え方によっては他の「城」や「敵」などを対象とする例と同様、「手ごわい」意とも解し得るものであったと考えられる。義輝本に見られる「コハク」の訓は、おそらくはそのような解釈に従って施されたものであろう。

45「舌強クシテ」の例は、舌が硬くこわばっているため動かしたり変形させたりするのが困難なさまの表現であり、やはり〈抵抗のある状態〉を示すもので、

○セメテハ名字ヲモ唱ント思ヘ共、舌コハクシテ、タヽシクハ云レス。

（古活字本『沙石集』巻八・愚癡之僧成牛事）

○風寒心脾ヲヤフレハ、シタコハクシテモノイワス。

（古活字本『全九集』巻五・唇口舌之論治）

のような例と同様に本来「コハシ」の用いられるべきところである。

なお8の「賢人所帰則其国強」は漢籍からの引用で『三略』下略に出典を有する。この部分は所見の施訓例によると、内閣文庫蔵『三略秘抄』、京都大学図書館清家文庫蔵・清原宣賢自筆『三略秘抄』には「コハシ」、同文庫蔵・元亀二年写『黄石公三略』には「ツョシ」の訓が見られ、両様の例が存する。また13の「以小砕大、以弱拉剛」も出典は未詳であるが、やはり漢文的表現と考えられる。[12] これら漢文的表現の例については、諸家による訓法の異なりなど特殊な事情を勘案する必要もあり、他の例と同様に扱う事はできないと考えられる。

一方、〈抵抗のある状態〉とは考えられず、本来「ツョシ」が用いられるところの11・15・27・28・44のような「馬」「力」「運」「心」「弓」などの強さを客観的に表現する場合、および2・6・24・31のように「縮ム」「切ル」「踏ム」「引ク」などの動詞を修飾し、その動作の実現のされ方の強さを示す「様態の副詞」[13]として用いられた例においては、諸本「ツョシ」で異同は見られない。すなわち、漢文訓読語的な場合を除く諸例においては、もともと「コハシ」であったか、あるいはそう受け取られる可能性のあった例においてのみ「ツョシ」との異同が生じており、しかもそれらは成立時期の下る版本類において顕著に見られることから、全体として「コハシ」→「ツョシ」という改変の方向が看取できる。それが最も端的に現れたのが整版本の例であり、同本では前掲の「コハシ」―「ツョシ」間に異同の存する例を全て「ツョシ」としている。一般に、江戸時代初期の整版本は、先行の古活字本が存在する場合、それに従って改刻されているものが多いことは周知の通りである。これは『太平記』の場合についても同様で、本稿に採り上げた元和八年杉田良庵刊本は片仮名交り整版本の嚆矢であるが、これは慶長元和中無刊記片仮名交り古活字本を覆刻し、それに振仮名を付したものである。[14] そこで再び諸本における「コハシ」―「ツョシ」の異同例を元和八年版によって見ると、それらは何れも「強」あるいは「剛」という漢字に附訓された例であり、しかも同本に見られる唯一の「コハシ」の例は、片仮名交り古活字本共々仮名書きの例である。従って元和八年版においては、片仮名交り古活字本で無訓となった「強シ」「剛シ」という漢字表記の例を一律に「ツョシ」と読んでいることがわかる。[15]

これは『太平記』諸本、特に整版本の成立当時、これら「強シ」「剛シ」に対しては「コハシ」よりも「ツヨシ」の訓がまずはじめに想起されるものであったことによる現象と思われ、そこには前述のような「コハシ」の用法が当時既に古語的なものになっていたことが影響しているものと考えられる。

現代語における「コハシ（コワイ）」は、普通、恐怖感情を表現する（以下〔「恐ろしい」意〕と称する）際に用いられるが、これは対象を「手ごわく危険なもの」と認識することが恐怖感情の発生へと連続するところから、[16]「手ごわい」意の「コハシ」より派生した用法と考えられ、室町期の抄物あたりから用例が認められる。[17]たとえば室町末―江戸初頭の口頭語資料の代表的なものである『虎明本狂言』によると

○／やいさて〳〵おそろしい物が出たは　／あゝこわや〳〵
（蟹山伏）

○／何と身共がおそろしひとおしやるか、おれは又なんぞよにおそろしひものがあって、おふるやるかと思ふて、とも〴〵きもをつぶひてふるふた、是はほうらいの島のおにといふもので、こはふはなひよなふ
（節分）

のように「コハシ」は「恐ろしい」意に用いられており、当時の日常語においては既にこの用法が最も一般的であったものと思われる。[18]またこのような「コハシ」の語義変化に伴い「ツヨシ」が、元来「コハシ」によって表現されるような〈抵抗のある状態〉の場合を含めて、広く〈強い状態〉を表現し得るようになっていたと考えられる。[19]一方「強」「剛」という漢字は本来「恐ろしい」意を表すものではないため、日常語における「コハシ」はこれらの漢字表記との間に次第に齟齬をきたしつつあったのであろう。

無論、当時の人々にとって『太平記』はすでに「古典」であり、当時の日常語とは異なる古語的表現がそこに現れたとしても、意図的に別の表現に改変することは考えにくい。しかしそれが「強シ」「剛シ」と漢字表記され本来の読みが不明になり、しかもそれを当時の日常語的感覚を以て「ツヨシ」と読んでも文意に誤りが生じることは認められない場合、「強シ」「剛シ」に対しては古語的な「コハシ」よりもむしろ当時の日常語としても理解しやすい「ツヨシ」の訓が想起され、結果的に「コハシ」→「ツヨシ」という改変が生じたものと考えられる。

三　「硬い」意の「コハシ」

既述のごとく、45「舌強クシテ」の例は舌が硬くこわばっている状態を示すものであるが、このような「コハシ」の用法は、

○はだあらくこはきちうしに、かくかきたてまつれ給。
（『宇津保物語』まつりのつかひ）

○はかまのこはきにかねして、ぬひ物にもうちはかまをしたる人もあり。
（『栄花物語』巻三十六・根あはせ）

○おほかたむかしは、かやうの事も知らで、さしぬきもながうて、ゑぼうしもこはくぬる事なかりけるなるべし。
（『今鏡』みこたち第八・花のあるじ）

○その夜より、こはき飯をおほくしてくはせけり。女みづから其飯をにぎりてくはするに、すこしもくひわられざりけり。
（『古今著聞集』巻十・相撲強力第十五）

のように古くからみられる、物質としての硬度が高い、すなわち

「硬い」という属性を持つものについて、それが「変形させるのに抵抗がある」さまを示す用法（以下「「硬い」意の「コハシ」」と称す）と同様のものと考えられる。このような意味の「コハシ」は、

○チカキ世ハウルシアツクヌルユエ、カムリエボウノヒタヒカタクテ、コヽロニマカセヌナリ。（『浅浮抄』）

のような例からも窺われるように、「ツョシ」よりむしろ「カタシ」との類義関係にあったものと思われる。

この「コハシ」は江戸時代以降の文献にも、

○強ひ飯粒で状封じるやうなもの（『譬喩尽』天明六〈一七八六〉年）

○うなぎはあやまらう。皮がこはくつて食へねへ（洒落本『通気粋語伝』上編・寛政元〈一七八九〉年）

のように少数ながら用例がみられ、現代語においても「こわい御飯」「ワイシャツの糊がこわい」などと言われることがある。[20]

『太平記』諸本の多くが45「舌強クシテ」の例を「コハク」とし、比較的原態が保存されているのは、これを「ツョク」に置き換えると文意が損なわれ、また「硬い」意の「コハシ」が当時の日常語の中に一応は残存していたことによるものと考えられる。[21]

しかしこの「硬い」意の「コワイ」は現在では古語的な表現となって余り用いられず、むしろ「カタイ」によって表現されるのが一般的である。これは使用される場面・文脈が異なるとはいえ、圧倒的に多く用いられる「恐ろしい」意の「コワイ」と同音衝突を起こしたためであろう。咄本『百物語』（万治二〈一六五九〉年刊）の序に「硬い」意の「コハシ」を「恐ろしい」意に誤解する話が見られるが、これは当時既にそのような同音衝突による混乱が生じていたことを示すものである。江戸時代の文献における「硬い」意の「コハシ」用例が少ないのは、このような同音衝突による衰退がかなり早い時期から始まっていたためかも知れない。

『太平記』整版本において45「舌強クシテ」の例に対し「ツョク」と誤って施訓されているのは、おそらくは「強シ」と表記されたものの施訓に際し、余り多く用いられない「コハシ」よりも使用頻度の高い「ツョシ」がまず想起され、それが充分な文脈的吟味を経ずに適用された結果ではないかと考えられる。このことは、「強シ」＝「ツョシ」であるという、現在の我々と同様の認識が当時既に存在していたことを窺わせる現象である。

四　「コハシ」「ツョシ」に対する用字意識とその変化

〈表二〉によると全体としては諸本に「強」「剛」「勁」[22]の漢字表記が見られるが、それぞれ「強」―「剛」、「強」―「勁」の異同は存するものの「剛」―「勁」の異同例はない。しかも「勁」字の見られる例は本来「ツョシ」であったと考えられるものに限られており、逆に「剛」の用いられた例は24の一例を除いて本来「コハシ」であったか、あるいはその可能性が考えられるものばかりである。[23]試みに室町末期の節用集類を参照すると、たとえば

○元亀二年本運歩色葉集：「ツョシ」＝強　「コハシ」＝強・剛
○清家文庫蔵本塵芥：「ツョシ」＝勁　「コハシ」＝強
○正宗文庫本：「ツョシ」＝項目なし　「コハシ」＝強・剛
○天正十八年本：「ツョシ」＝勁・強　「コハシ」＝強・剛
○饅頭屋本：「ツョシ」＝項目なし　「コハシ」＝強
○弘治二年本：「ツョシ」＝強・勁　「コハシ」＝強・硬[24]

○黒本本：「ツヨシ」＝項目なし　「コハシ」＝強・剛
○枳園本：「ツヨシ」＝勁・強　「コハシ」＝強・剛
○易林本：「ツヨシ」＝強・剛　「コハシ」＝剛・強

のようにあり、それぞれの系統に属する他本も概ね同様である。『太平記』諸本に見られる漢字表記の分布はこれら節用集類の記載に大略一致し、室町期には概ね、

「ツヨシ」＝強・勁
「コハシ」＝強・剛

という用字意識の存したことが窺われる。[25] ところが、〈表二〉の異同を詳細に見ると、梵舜本や古活字本の例からもわかるように、「勁」字は「強」字に集約されて行く傾向が窺われる。江戸時代以降の文献では「ツヨシ」に「強」字を用いた例は多くみられるものの、「勁」字の例は余り見られなくなり、江戸時代後期に流布した早引節用集の類にも「ツヨシ」の項には「強」のみが掲げられている。「強」は『太平記』諸本において「コハシ」「ツヨシ」の表記に最も広く用いられているが、古く『三巻本色葉字類抄』にも「コハシ」「ツヨシ」両項目の最上位に掲出されており、[26] また訓点資料や『類聚名義抄』をはじめとする漢和辞書にも「コハシ」「ツヨシ」の両訓がみられ、早くからこの両語と緊密な関係にあったことがわかる。[27] ところが室町末―江戸初頭頃になると、「コハシ」の語義変化により「強」と「コハシ」との関係が揺らぎ始め、その結果、現在のような「強シ」は「ツヨシ」とのみ読まれ、また「ツヨシ」の漢字表記には専ら「強」が用いられるという関係が成立するようになったものと考えられる。[28] 「勁シ」の使用の衰退は、このような「強」字と「ツヨシ」との結びつきの強まりと相関関係にあるものと考えられる。

なお「強」は『譬喩尽』の例のように「硬い」意の「コハシ」の表記に用いられることもあったが、「強」の用いられる例は米飯類を形容する場合が多いようであり、やや慣用的な用字法であった可能性が考えられる。しかしこの場合も明治期以降の文献には、

○今日粟飯の硬きを食ふ身となつては（徳富健二郎『思出の記』）
○磨ぎたてを炊くと硬く出来ますし、磨ぎ置きは柔く出来ます、（村井弦斎『食道楽』飯の炊方）
○「御飯が少し冷えてますね」「冷えてるのはいゝが、硬過ぎてね。―以下略―」（夏目漱石『虞美人草』）

のごとく、「強」よりもむしろ「硬」[20] を用いた例のほうが多く見られるようになる。

一方「剛」字は、本来「ツヨシ」よりも「コハシ」との結びつきが強いこともあって、比較的後の時代まで「コハシ」の表記に用いられ、

○毛の剛いガサ張つた束髪（石坂洋次郎『若い人』）

のように毛髪などに対して用いれた例がみられるが、現在では前述のように「硬い」意の「コワイ」自体が古語化・老人語化しているため、「剛イ」は傍訓によって読みが示されない限り「コワイ」とは読みにくくなっており、「ツヨイ」、あるいは文脈的解釈により「カタイ」と読まれる可能性が高い。同様に前掲のような「硬イ」も現在ではむしろ「カタイ」と読む方が一般的である。また「剛」字は、

○剛ひ物は見たし聞たし（『譬喩尽』）
○ボユツサ（bouoq＝恐ろしい）　剛シ　又恐敷也

（『魯西亜弁語』寛政八〈一七九六〉年頃）

のように「恐ろしい」意の「コハシ」の表記に用いられた例も見られる。[31] これらは一方で「硬い」意の「コハシ」が存在していたこともあり、「コハシ」の意味に関係なく伝統的な用字法に従って表記されたものと考えられる。このように「恐ろしい」意の「コハシ」は江戸時代に入っても「剛」字によって表記されることがあったが、その用例は余り多く見られず、必ずしも日常語的な用字意識の反映ではない可能性が考えられる。また、その場合でも一旦「剛シ」と表記されたものを判読する際にはやはり混乱が生じたようである。すなわち『譬喩尽』の例のように、文脈上「恐ろしい」意の「コハシ」であると判断可能な場合にはさほど問題が生じないかもしれないが、文脈的判断が不可能な場合はそれを『太平記』の例のごとく「ツヨシ」（あるいは「カタシ」）と読まれる恐れがあり、またたとえ「コハシ」と読まれたとしても「硬い」意に誤解される可能性が存したであろう。たとえば前掲『魯西亜弁語』の例においては「剛シ」に「こはし」という読みが示されているが、同書においてこのような傍訓の施された例は少なく、しかも施訓例は「搦」「穢ル」「邪」「木の末」のように読み方の難しい語、誤読の恐れのある語に対するものがほとんどであることから、本例も誤読を避けるためのものと考えられる。また、「又恐敷也」という注記もこれが「恐ろしい」意であることを明示する必要から付されたものと考えられる。

このような問題もあり、「恐ろしい」意の「コハシ」に対して一般には

○怖い異見も聞て居るうち

（川柳『武玉川』四編・宝暦二〈一七五二〉年）

○出たるは腰より下のなき白小袖幽霊ならめと弐人の者は空恐しく怖ひ時の仏頼みぞをかしけれ。

（洒落本『大通俗一騎夜行』安永九〈一七八〇〉年）

○畏ひ事無世に畏ひ御制札

（『譬喩尽』）

○世の中は化物は怖ないが馬鹿ものがこはいといふ。

（滑稽本『浮世床』初編・文化〈一八一一〉年）

のような恐怖感情を示す漢字表記が用いられるようになる。

また、「恐ろしい」意の「コハシ」の使用の拡大は、

○かゝる御悩の折節に合て怖キ御妖怪とも数多とりいり奉ル[32]

（尾崎本『平家正節』巻十二上、許文・安永五〈一七七六〉年）

のように、本来「手ごわい」意の「コハシ」であったものを当時の日常語的解釈によって「恐ろしい」意に理解する現象をもたらす。現行の注釈書類では、『太平記』において唯一諸本「コハシ」で全く異同の見られない3「思切タル者ドモガ死狂ヲセント引籠タルガコハサニ」の例を「恐ろしい」意に解釈しているが、この例も基本的にはその直後に現れる4の例などと同様、「死を決心した者どもが死にもの狂いに戦おうと引き籠もっているのが手ごわいので」の意と考えられる。しかし、前述のように室町末期に「恐ろしい」意の「コハシ」が一般化していたことは事実であり、本来はそのような意味でなくとも、書承の過程において『平家正節』の場合と同様「恐ろしい」意に理解された可能性が考えられる。本例は4の例などと比べると仮名書きされることが多く、片仮名交り古活字本においても仮名書きのまま残されたのは、あるいは「恐ろしい」意に解された「コハシ」に対して「強」字を用いることに違和感があったためかも知れない。

おわりに

語の意味と漢字表記の関係およびその変化は古辞書類、古記録等における用字法、その他様々な文献における付訓例などから窺うことができるが、ある程度習慣的・固定的な側面を有する用字法に変化が生じるに至るまでにはどのような過程が存するのかを捉えることは難しい。本稿では『太平記』諸本における異同例を手がかりとして、「コハシ」「ツョシ」に対する用字意識の変化と、その背後に存する「コハシ」の語義変化との関わりについて考察を加えた。

「コハシ」が「手ごわい」意から「恐ろしい」意へと語義変化を起こすことにより、「強シ」「剛シ」から「怖シ」「恐シ」へと漢字表記の変化が生じることは一見単純な現象のようではあるが、その過程には「強シ」という漢字表記を同じくする類義語「ツョシ」の存在が深く関わっている。また「強」が専ら「ツョシ」の表記に用いられるようになった結果、江戸時代以降も残存する「硬い」意の「コハシ」の用字法にも影響を与えた。

「コハシ」―「ツョシ」のように漢字表記を同じくする類義語が存する場合、一方が語義変化を起こすことによって、それまで微妙な均衡で保たれていた表記体系に影響が生じ、両語に対する用字意識はお互いに関わり合いながら変化を遂げるものと考えられるのである。

注

(1) 拙稿「"強(こは)し"と"強(つよ)し"――『平家物語』諸本にみられる用字意識の変化――」(前田富祺編『国語文字史の研究 一』一九九二年 和泉書院)＊以下「拙稿」と称す。

(2) 写本群の呼称は『日本古典文学大辞典』(岩波書店)所収のもの(鈴木登美恵氏執筆)に従った。なお日置本のみは長谷川端氏のもの(『中京大学図書館蔵太平記』解題 一九九〇年 新典社)によった。なお調査には基本的に原本あるいは複製本(含マイクロフィルム)を用いたが、西源院本のみは原本焼損のため鷲尾順敬氏校訂刀江書院刊の活字本によった。

(3) 片仮名交り整版本としてはこの他に刈谷市立図書館村上文庫蔵寛永八年刊本、大阪大学国語学国文学研究室蔵寛文十一年刊本を調査したが、元和八年版との異同はみられなかった。

(4) これらの諸本は仮名書き部分および傍訓が多く、検索に便があるため底本として用いた。

(5) 採集にあたっては基本的に単純形容詞(―サ形を含む)として用いられたもののみを採り、重複形容詞、派生語、語構成要素となったものは採らなかった。これらには個別の異なる事情が存し、単純形容詞の場合とは必ずしも同様に扱えないと考えたからである。ただし複合形容詞の可能性のあるものは、その認定が困難なため採録した。

(6) 掲出に用いた慶長元和中刊無刊記片仮名交り古活字本と大系本(底本＝慶長八年刊片仮名交り古活字本)とは本文に小異があるが、今回の考察に影響のある異同例は見られなかった。

(7) 「ツョク」―「ツョリ」の異同などは片仮名表記に原因する可能性がある。

(8) 以下「強シ」「剛シ」と記す場合は、「強」「剛」が和語形容詞の表記に用いられていることを示す。

(9) 「剛」は後述するように主に「コハシ」の表記に用いられる。

(10) 山内潤三・木村晟「平松家旧蔵本平家について」(『平松家旧蔵本平家物語』一九六五年 古典刊行会)一四四頁参照。なお語の識別のために語頭訓が用いられることは、既に平安初期から行われていたようである。(柴田雅生『東大寺諷誦文稿』の付訓方法について」『国語学研究』二六 一九八六年十二月)

(11) 「コハシ」「ツョシ」両語の類義性と相違点については、拙稿一四一―一四三頁参照。

(12) なお「剛」は「弱」(諸本異同なし)との対応を考えると、玄玖本等

にあるごとく「強」とするのが適当と考えられる。

(13) 仁田義雄氏の用語による。（仁田義雄「結果の副詞とその周辺」（渡辺実編『副用語の研究』一九八三年　明治書院）一二五頁等参照。）

(14) 筆者の調査したところ両者は振仮名、返点、句読点の有無を除けば行割り、丁附、柱、文字遣、字体に至るまで全く同じであった。

(15) 古活字本の漢字表記を原因とする古写本―整版本間の本文異同の例は他文献においても見られ、『源平盛衰記』における「情」字を介する「ヤサシ」→「ナサケナシ」、「煩」字を介する「カヌ」→「ワヅラフ」等の事例が報告されている。（岡田三津子「『源平盛衰記』本文考――慶長古活字本の表記を通して――」『文学史研究』三十二　一九九一年十二月）

(16) このような恐怖感情発生のメカニズムは心理学、認知科学の方面においても分析されている。たとえば、戸田正直『感情――人を動かしている適応プログラム』一九九二年　東京大学出版会、四一―五〇頁等参照。

(17) 例えば、

○［唯子胥懼］曰、是棄呉也。諫曰、―以下略―］唯子胥―伍員ガ是ヵ コワイソ。呉ニヨウアタルカ呉ヲ棄ルチヤトテ諫ルソ

（古活字本『史記抄』巻九）

のような例が見られる。

(18) 拙稿一五六―一五九頁参照。なお、東国方言として用いられる「疲れた」意の「コワイ」も、「恐ろしい」意とともにこの頃「手ごわい」意から派生したものと考えられる。この「疲れた」意の「コワイ」は、方言という性格上、文献に残された用例が少なく、しかもほとんどが仮名書き例であるが、近代の文献には、

○本当に俺ら太義〈傍訓「こは」〉えなあ（長塚節『土』）

のように漢字が当てられた例も見られる。

(19) 但し「手ごわい」ことを特に表現する際には、「テゴハシ」（『平家物語』あたりから用例がみられる）が用いられたようである。

(20) 現代語における用法については、国立国語研究所（西尾寅弥）『形容詞の意味・用法の記述的研究』（一九七二年　秀英出版）四三二―四三三頁、森田良行『基礎日本語　1』（一九七七年　角川書店）において分析されている。

(21) なお「強」に対する「カタシ」の訓は、古辞書・訓点資料その他の文献においても未見であり、この例を「カタシ」と読むことは不可能であったと考えられる。

(22) 西源院本においては「勁シ」はなく、「健シ」の例が見られる。なお「健」は『三巻本色葉字類抄』の「ツヨシ」「コハシ」両項目に掲出されている。

(23) なお、10の例は簗田本、版本に「ツヨク」、日置本に「カタク」とあり、他本は無訓のため未詳であるが、文脈より判断すると7あるいは32と類似しており、「コハシ」の例であった可能性が考えられる。なお簗田本は7・32共に「ツヨシ」としており、神田本、玄玖本等との異同がみられる。

(24) 「強」は右訓「コワル」左訓「コワシ」。また「剛」は「コワル」の項に掲出されている。

(25) 「剛」は「カタシ」の表記に用いられる可能性も考えられるが、「カタシ」には「堅」「固」の表記の方が一般的である。

(26) 『三巻本色葉字類抄』各篇の人事・辞字両部所収各項目の掲出漢字には、多くの場合、掲出最上位漢字が日常常用の漢字に一致するという顕著な傾向が窺える。（峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』一九八六年　東京大学出版会、一九九頁）という指摘がある。

(27) ただし訓点資料には「コハシ」の施訓例の方が多いようである。

(28) ただし、「情ガ強（コハ）イ」のように慣用表現になったものには「コハシ」に「強」字が使われることがある。

(29) 「硬（コハシ）」は、前掲『弘治二年本節用集』に見られ、また『書言字考節用集』等にも掲出されている。

(30) なお、「強飯（コハイヒ・コハメシ）」という語の表記には「強」字が用いられるが、この語も現在では余り使用されない。

(31) 動詞「コハガル」に対しても、

○安立町沙牟を剛〈傍訓「こは」〉がる矮鶏の鳥　（『譬喩尽』）

のような例がみられる。

(32) 覚一本『平家物語』に、

○かゝる御悩の折節にあはせて、こはき御物気共取いり奉る。（巻三・赦文）

とある。

―本学助手―